THE LOOK OF THE SKY

束 紗季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＨＥ　ＬＯＯＫ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＳＫＹ

【Ｎコード】
Ｎ３９２０ＢＡ

【作者名】
束　紗季

【あらすじ】
とある魔法や魔物が存在する世界。そこで少年シオン＝メテオハーツは１人の少女と出会った。それをきっかけに彼の周りは急激に変化していく・・・・・・・

第一話（前書き）

小説第二段です。今回はファンタジー路線で頑張ってみました。良かったら感想お願いします！！

第一話

とある時空の魔法や魔物が存在する世界。その中にある４つの大陸の内の１つであるヴァサーリ大陸にある緑豊かな草原の上を歩いている１人の少年がいた。

茶色の短めで所々跳ねている髪で金色の瞳をしている。少々目はつり上がっているが整った顔つきをしている。格好は東にあるヤマトという大陸固有の浴衣で白地に黒のディテールが施されていて動きやすいようにアレンジしていて、下には灰色のズボンを履いている。両腰にはこれまたヤマトで造られている刀で鍔は無く白の柄に灰色の鞘に収まっている刀を下げている。

その少年の名はシオン＝メテオハーツ。１７歳で探検者である。

依頼の帰りであるシオンが草原を歩いていると、前方に何やら人の集団が見えた。何事かなと思っていると突然炎が上がったり雷が鳴ったり空気が弾ける音が聞こえ、魔法を使っているのが見えた。

ただ事ではないなと判断して、その人の集団に向かって走り始めた。

段々近づいていき目を凝らしていると、人の集団は野盗であり、その前には１人の少女がいた。そしてその少女に向かって野盗の１人が剣を振り上げたの見た瞬間、シオンはその場から消えたかのような速さで駆けていった。

１人の少女は歯噛みをしていた。自分はこんなに簡単に殺されて終わってしまうのかと。
栗色のウェーブがかった長い髪で灰色の瞳をしている。普段ならおっとりとしていて優しそうな顔つきなのだろうが、今は必死さが滲み出ていた。格好は簡易な服装で所々ボロボロになっており、先ほどの戦闘の激しさを物語っている。
膝をつき、見下ろしてくる野盗たちを見上げて睨む。が、野盗たちは笑い、１人の男が前に出てきて少女に言葉を放った。

「残念だったな。まぁよく粘ったがこれまでだ。」

現実を突きつけられて泣きそうになるが堪えて男に聞く。

「これはお父様からの指示ですか・・・・」

「んなもん、今から死ぬ奴に言った所でどうしようもねぇだろ」
笑いながら男は手に持っている剣を振り上げた。

「これで依頼完了だ。さようなら、お姫様！！」

勢いよく剣を振り下ろしてきて堪えきれない涙を流していて死を覚悟した。
が、一向に痛みがやってこない。目を開けて見るとヤマトの浴衣を着た１人の少年が剣を刀で受け止めていた。
そして、少年はこちらを向き声をかけてきた。

「間一髪だったな・・・・大丈夫か？」

ギリギリ間に合って剣を受け止めて、少女の方を顔だけ向け、声をかけるが、ポロポロと泣き始め、聞くのは後にするかと決め、とりあえず受け止めていた剣を弾いた。　野盗の男は少しよろけたがすぐに体制を立て直し、怒声を上げてきた。

「テメェ何モンだ！？」

「通り掛かりの探検者だ」

そう答えると野盗たちは怒りを露わにし始める。

「ふざけてんのか！？勇者きどりかテメェは！？」

「まぁそういうことになるかな。さしずめお前たちはか弱い少女に襲いかかる悪人ってことだな」

野盗たちはますます怒りを露わにしていた。すると前に出ていた男の左右から1人ずつ男が剣を振り上げながら襲いかかってきた。シオンは冷静に対応して鞘がついたままの刀で2本の剣を受けると同時に叩き壊した。男たちは呆気にとられる中、シオンは自分の右側にいる男の頭に向けて蹴りを放った。男は対応出来ず蹴りによって頭を打ち抜かれ昏倒した。その勢いのまま、左側にいる男にむけて回し蹴りを繰り出して昏倒させた。

一瞬の出来事で野盗たちは反応できなかったが、2人の男が地面

に倒れる音を聞いて気を取り直し、今度は全員で襲いかかってきた。
シオンは自分の後ろにいる少女に視線をやり、この子がターゲットなら近づかせる訳にはいけないと判断し、一瞬で終わらせると思い、次の瞬間、消えるような速さで移動して男たちの所に向かい、一気に5人以上も叩き伏せた。
間髪いれずに次々と相手を鞘付きの刀1本で気絶させていき、10秒には多数いた野盗たちはリーダーと思われる男を残して気絶していた。
あまりの出来事に固まっている男にシオンは声をかける。

「さて、残るはお前だけだな。なんでこの子を襲っていたのか理由を聞こうか。」

「そ、それは・・・・・」

男は後ずさりしながら答えようとする。と、

「言うわけねぇだろ!!〈ファイヤーボー・・・〉」

手を前にかざし魔法の起動キーを詠唱し始めたのですぐさま間合いを詰めて柄の先端で相手の喉を突き止める。
男はむせてしまい詠唱は出来ず、シオンはそのまま相手の頭を掴み、地面に叩きつけた。
凄い音が辺りに鳴り響き、頭は地面に数?埋まっていた。
野盗全員を片付け終わり、改めて後ろにいる少女に振り向いて近づいた。
その少女も目の前で起こった出来事に目を見張っていたので、シオンは苦笑した。

「改めて何だけど、大丈夫か?」

シオンはしゃがんで少女と目線をあわせる。すると少女は慌てて目を袖でこすり答えた。

「は、はい。危ないところ助けて下さりありがとうございます。」

ペコリと頭を下げる少女。シオンは格好を見て所々血が出ている事に気づき、おもむろに浴衣の袖に手を入れ、傷薬を取り出して怪我をしている所に塗った。

「痛っ！！」

「俺治癒魔法使えないんだ、悪いな。けどこの傷薬は市販で売っているのより何倍も効くやつだからちょっと我慢してくれ。」

そう言いながら傷口に薬を塗っていく。時々痛さで身をすくめていたが、嫌がらず治療を受けていた。

あらかた塗り終わった後、シオンは立ち上がった。

「さて、治療も終わった事だし事情を聞きたいんだけど・・・・」

言いながら後ろを振り向くと、気絶した野盗たちが沢山転がっていた。

「ここじゃ無理かな。」

再び少女の方に向き直る。

「少し移動したいんだけど立てるか？」

少女は立とうとするが足に力が入らないのか、立つことが出来なかった。
「すみません、無理みたいです・・・・」
「まぁ、さっきまで命を狙われてたんだ。しょうがないよ。」
そしてシオンは少女を抱えた。所謂お姫様抱っこの状態である。
「ちょっ、あの！！」
「少しの間我慢していてくれよ」
少女は赤面して何か言おうとしたが、シオンが意に介さず、すぐに走り始めた。勿論、野盗たちは近くにあった森の木に猿ぐつわをして縛り付けてきた。

シオンは少女を抱えたままかれこれ1時間以上も汗をかかずに走り続けていた。その間、少女は顔を赤くして俯いていて、時折シオンの顔をチラチラと見ていた。
すると前の方に町が見えてきた。大きさは中規模ぐらいで結構栄えているようだ。
「そろそろ日が暮れる頃だからあの町で一泊するぞ。」

確認を取ると小さくコクンと頷いていた。
するとシオンはお姫様抱っこからおんぶに切り替えた。少女は戸惑っていたが理由を話す。

「こっちの方があんまり目立たないのと言い訳しやすいんだ。後悪いんだけど気絶しているフリをしていてくれるか？」

戸惑いながらも指示に従って目をつむって気絶しているフリをした。確認すると先ほどより遅いスピードで走り始めた。　そして町の入り口までくると、門番に止められた。

「身分証明書を提示してくれ」

シオンは自分の懐からギルドカードを取り出して門番に見せる。ＯＫを貰い門番はおぶっている少女に目をやった。

「その女は？」

「先ほど野盗に襲われている所を助けたんだ。少人数だったから倒せたんだが気絶していてな。それに荷物も盗られていいたんだ。辺りを探してもなくて身分を証明出来るものはないんだが・・・・」

門番は目を見開き周囲を警戒し始める。

「その野盗には他のメンバーもいるのか？」

「分からない、が、荷物が無かったから恐らくはいるのだろう。」

答えるとその門番は他の門番と連絡を取り扱い周囲を警戒するよ

う呼びかけた。

「情報の提供感謝するぞ。」

「そりゃどうも。後もう1つ。この町で1番いい宿屋はどこにある？」

「そこなら真っ直ぐ行ったところに白い建物がある。そこが町で1番の宿屋だ。」

門番に礼を言いその宿屋へと歩みを進めた。　言われた通り宿屋に着き、フロントで料金を払い部屋に行き扉を開いてみると、結構な広さがあり、これならゆったりと休めるなと思った。

備え付けてあるベットに近づき少女を降ろす。ゆっくりとベットへと腰掛けた。

「どこか痛む所はあるか？」

「いえ、お陰様で大分よくなりました。」

その言葉わ聞き内心ほっとしたシオンであった。腰にさしてあった刀を机の上に置き、椅子をベットの近くまで持って行き、少女と向き合った。

「さて、改めて事情を聞きたいんだが・・・・」

すると少女は暗い表情になり俯いていてしまった。

答えてくれそうにないので自分の中で推理した事を告げた。

「1番最初に聞くんだが・・・・お前、ガウス王国第一皇女シル

ヴィア＝エクシリス＝ガウスだろ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3920ba/

THE LOOK OF THE SKY

2012年1月12日03時45分発行